

令和6年度農作物有害動植物発生予察情報 発生予報第5号（8月）

令和6年7月31日
山形県病害虫防除所

〔概要〕 7月25日からの大雨により、一部の水田や畑地で浸水・冠水が発生しており、農作物への影響が懸念されます。農作物への影響を最小限にとどめるため、技術対策を早急を実施してください。

普通作物：穂いもちの発生量は平年並の予想です。茎葉散布剤による防除は適期を逃さないように穂孕後期及び穂揃期に必ず2回実施してください。

斑点米カメムシ類の発生量は多い予想です。穂揃期及び穂揃期7～10日後の2回、必ず薬剤防除を実施してください。

園芸作物：果樹の病害および共通害虫は、全般に発生量が多い～やや多い予想です。散布間隔があきすぎないように注意し、防除を徹底してください。秋冬ねぎのシロイチモジヨトウの発生量はやや多く、野菜花き共通のオオタバコガの発生量は多い予想です。早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を実施してください。

次の発表は8月28日の予定です。

予報内容一覧

作物名	病害虫名	発生量
いね	穂いもち	平年並
だ い ず	紋枯病	多
	斑点米カメムシ類	多
	マメシンクイガ	多
	ジャガイモヒゲナガアブラムシ	平年並
りんご	ウコンノメイガ	平年並
	斑点落葉病	やや多
もも	褐斑病	やや多
	せん孔細菌病	平年並
	褐色せん孔病	多
	果樹カメムシ類（り・も・な・か）	やや多
	ナミハダニ（り・も・な・お）	やや多
おとう	ナシヒメシンクイ（り・も・な）	平年並
	果樹共通害虫	多
夏秋きゅうり	炭そ病・褐斑病	平年並
秋 冬 ね ぎ	べと病	平年並
	斑点細菌病	平年並
	葉枯病	平年並
	ネギアザミウマ	平年並
野菜・花き共通害虫	シロイチモジヨトウ	やや多
	アブラムシ類（夏・す・き）	やや多
	ハダニ類（夏・す・え・き）	平年並
	オオタバコガ（夏・す・ね・え・き）	多

下記の病害虫は、防除上注意すべき事項などについて記載しています。

作物名	病害虫名
いね	コブノメイガ
だ い ず	紫斑病
り ん ご	黒星病、輪紋病・炭そ病、キンモンホソガ
も も	灰色かび病・晩腐病、べと病・褐斑病・さび病
も も	灰星病
西 洋 な し	輪紋病
日 本 な し	黒星病
果 樹 共 通 害 虫	モモシンクイガ（り・も・な）、ウメシロカイガラムシ（も・お）
き ゅ う り	うどんこ病
す い か	炭そ病・つる枯病、褐色腐敗病・疫病
秋 冬 ね ぎ	さび病・ネギハモグリバエ
え だ ま め	ダイズサヤタマバエ
き	アザミウマ類
畑作物・園芸作物共通害虫	ハスモンヨトウ（豆・か・夏・ね・え・き）

（ ）内 豆：だいちず、り：りんご、も：もも、な：なし（西洋なし、日本なし）、お：おとう、か：かき、夏：夏秋きゅうり、す：すいか、ね：秋冬ねぎ、え：えだまめ、き：きく

山形県病害虫防除所	本 所	TEL 023-644-4241	FAX 023-644-4746
	庄内支所	TEL 0235-78-3115	FAX 0235-64-2382

山形県病害虫防除所トップページ	https://agr.in.jp/theme/byogaichubojosho/index.html
農作物有害動植物発生予察情報	https://agr.in.jp/theme/safe_products/yosatsu/index.html

山形県農薬危害防止運動実施中

実施期間 令和6年6月1日～8月31日

山形県では関係機関と連携して、農薬が最も使用される時期を重点に、農薬による事故防止と、より一層の農薬適正使用に向けて農薬危害防止運動を行っています。農薬の使用に当たっては、以下の点に注意しましょう。

1. 農薬の購入と保管管理に当たって

- ★農薬は農林水産省登録番号のあるものを、必要量だけ計画的に購入しましょう。
- ★購入時は有効年月を確認し、期限内に使用しましょう。
- ★農薬は盗難・誤用の防止等のため、鍵のかかる専用保管庫で保管しましょう。
- ★不用になった農薬を処分する場合は、農協や農薬販売店等にご相談ください。また、農薬の空容器、空袋等は、廃棄物処理業者に処理を委託する等適切に処分しましょう。

2. 農薬の使用に当たって

- ★ラベルに記載されている①適用作物、②使用量（希釈倍数）、③有効成分ごとの総使用回数、④使用時期（収穫前使用日数）等をよく読んで、記載事項を正しく守って使用しましょう。
- ★農薬散布に当たっては、事前に周辺の生産者、養蜂家、住民等に防除計画をお知らせするとともに、周辺ほ場の農作物や住宅地、公共施設、家畜、河川等への飛散・流出を防止するため、次の点に十分に注意しましょう。
 - ア 風の強いときを避け、風向に気をつけて散布しましょう。
 - イ 散布量が多くなりすぎないように気をつけましょう。
 - ウ 散布の方向や位置に気をつけて散布しましょう。
 - エ 飛散しやすい細かい散布粒子のノズルは使わないようにし、散布圧力は必要以上に上げすぎないようにしましょう。
- ★散布者自身の事故防止のため、農薬用マスク、保護メガネ、防除衣、手袋等を必ず着用するとともに、気温が高いときや、体調が悪いときは散布をしないようにしましょう。
- ★公園等で病害虫管理を行う時は、「公園・街路樹等病害虫・雑草管理マニュアル」（環境省ホームページで公表）を参照してください。

3. 農薬散布後は

- ★タンクやホースは確実に洗浄し、また、洗浄液が排水路や河川等に流出しないようにしましょう。
- ★農薬の使用月日、農薬名、対象作物名、使用量（希釈倍数）等を忘れずに記録し、保管してください。

4. 万が一の事故の場合

- ★農薬の誤使用等で健康被害が発生した場合には、応急処置を行い、速やかに最寄りの医療機関で処置してもらいましょう。

農薬の相談は：○食品安全衛生課(023-630-2160)
○農業技術環境課(023-630-3419)
○病害虫防除所(023-644-4241) 庄内支所(0235-78-3115)
○最寄りの各総合支庁各農業技術普及課

農薬情報は：○やまがたアグリネット <https://agrin.jp/>

毒物・劇物の相談は：○最寄りの各保健所
・山形市保健所(023-616-7261)
・村山保健所(023-627-1248) ・最上保健所(0233-29-1257)
・置賜保健所(0238-22-3872) ・庄内保健所(0235-66-5478)
○健康福祉企画課(023-630-2332)

公園等病害虫等管理 マニュアルの相談は：○水大気環境課(023-630-2339)

1. 農薬使用基準（適用作物、使用量（希釈倍数）、使用回数、使用時期（収穫前使用日数））を遵守する。
2. 合成ピレスロイド剤等を使用する場合は、市町村農作物有害動植物防除協議会等で定めた地区に限って使用し、蚕・魚類に対する被害を防止する。
3. 耐性菌・抵抗性害虫の出現を防止するため、薬剤の選択及び使用回数に留意する。
4. 農薬の使用に当たっては、農薬使用者と養蜂家がお互いに連携をとりながら、農薬の使用によるミツバチへの危害を防止する。
5. 農薬の使用後は防除日誌の記帳に努める。

予報根拠中の記号 (+)：発生量を多くする要因 (-)：発生量を少なくする要因

I 普通作物

1. いね

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 穂いもち	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在、葉いもちの発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多く、日照時間はほぼ平年並と予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 茎葉散布剤による防除は穂孕後期及び穂揃期に必ず2回実施する。

イ. 圃場の生育状況をよく観察し、適期を逃さず実施する。特に、航空防除による共同防除が天候等により適期を逸する場合は、個人防除を検討する。

ウ. 上位葉で葉いもちの発生が多く見られる圃場や出穂期前後に降雨が続いた圃場は、穂いもちの発生が増加する恐れがあるため、穂揃期散布の7日後に追加防除を実施する。

エ. 薬剤耐性菌出現防止のため、同一成分の薬剤の連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) 紋枯病	多い

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量はやや多い。(+)

イ. 7月19日の生育調査では、茎数が平年に比べ「はえぬき」ではやや少なく、「つや姫」では多く、「雪若丸」ではやや多かった。

ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく観察し、発生が確認される場合は下表の防除要否の目安を参考に穂孕後期又は出穂期の防除を行う。

イ. 薬剤散布を行う場合は、株元に十分付着するように散布する。

表 防除要否の目安（調査場所：水田中央部） 品種：はえぬき

判定時期	防除の判断基準
穂孕後期	発病株率 10%以上で防除
出穂期	発病株率 15%以上で防除

※1筆当たり5条おきに20株の計100株を水田中央部まで調査

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 斑点米カメムシ類 (アカシジカスカメ ・アカヒゲホリトリスカメ ・オトゲシホカメムシ)	多い

<7月2日付け 注意報第2号発表>

<7月25日付け 注意報第3号発表>

1) 予報の根拠

- ア. 7月後半の巡回調査の結果、斑点米カメムシ類の畦畔・農道等における発生確認地点率は高く、平均すくい取り虫数は多い。(＋)
- イ. 7月後半の巡回調査の結果、斑点米カメムシ類の水田内における発生確認地点率はやや高く、平均すくい取り虫数は平年並である。
- ウ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 穂揃期及び穂揃期7～10日後の2回の基本防除を徹底する。なお、圃場の出穂状況をよく確認し、適期に防除する。
- イ. 近年、8月後半以降の加害リスクが増加傾向にあるので、穂揃期7～10日後の薬剤防除(基本防除2回目)を実施後に水田内のすくい取り調査を行い、斑点米カメムシ類の飛来・生息が確認された場合は、基本防除2回目の防除から7～10日後に補完防除を実施する。
- ウ. 例年、8月下旬以降の斑点米カメムシ類の発生が多く被害が見られる圃場で、防除回数を2回とする場合は、出穂期10日後頃及びその7～10日後に防除時期を変更してもよい。なお、薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、防除を実施する。
- エ. 水田内にノビエやイヌホタルイが多い圃場では、斑点米カメムシ類の水田内での発生が多くなるので注意する。
- オ. 畦畔・農道等水田周辺の草刈りは、斑点米カメムシ類の水田侵入を促し、斑点米の発生を助長するので原則行わない。やむを得ず草刈りを行う場合は、水田の薬剤防除計画に合わせて実施する。
- カ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、同一成分の薬剤の連用を避ける。

(4) コブノメイガ

7月後半の巡回調査の結果、被害は見られていないが、今後、台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので発生動向に注意する。

2. だいで

(1) 紫斑病

開花期25～35日後に薬剤散布を行う。なお、薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) マメシクイガ	多い

1) 予報の根拠

ア. 前年の発生量は多かった。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 連作圃場や前年発生が多かった圃場では、生息密度が高くなる傾向があるので、8月下旬（8月25日頃）及び9月上旬（前回散布10日後）の2回、必ず薬剤散布を行う。

イ. 薬剤散布を行う場合は、莢に薬剤が付着しないと十分な防除効果が得られないので、ていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ジャガイモ ヒゲナガアブラムシ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在、本種の寄生及び加害による吸汁痕（黄色斑点）の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(－)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 8月以降急激に増加することがあるので、現在発生が少ないところでも定期的に圃場を見回り、葉裏の寄生状況をよく観察する。本種の寄生虫数や吸汁痕の増加が見られる場合には、速やかに薬剤散布を行う。

イ. 薬剤散布を行う場合は、薬剤が葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(4) ウコンノメイガ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

8月上旬頃から被害（葉巻）が目立ち始めるので、圃場をよく観察し、被害が多い場合は防除を行う。特に、生育の旺盛な圃場や葉色の濃い圃場で多発生する傾向があるので注意する。

II 園芸作物

1. りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 斑点落葉病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 8月中旬までは重点防除時期なので、発生が見られる園では薬剤防除を徹底する。
なお、品種ごとの収穫開始時期を考慮し各薬剤の総使用回数、収穫前使用日数を厳守する。
- イ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高める。
- ウ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。

(2) 黒星病

7月29日現在の発生量はやや少ない。今後、降雨が続くと発生量が多くなるので、以下の対策を実施する。

- ア. 発病葉及び発病果は、二次伝染源となり、その胞子の飛散時期は収穫まで長期間に渡るため、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。
- イ. 薬剤散布に当たっては、不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高めるとともに、十分な薬液量(5000以上/10a)で、ていねいに散布する。また、スピードスプレーヤーで防除する場合は、走行速度や散布経路に注意し、散布ムラを防ぐ。
- ウ. 薬剤散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行うとともに、散布間隔があきすぎないようにする。なお、降雨が続く場合は、雨の合間を見て防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 褐斑病	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月後半の巡回調査の結果、発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. 例年発生が見られる園では、発生初期の防除を徹底する。
- イ. 降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。
- ウ. 不要な徒長枝はせん除し、樹冠内部への薬液到達性を高めるとともに、散布ムラが生じないようにていねいに薬剤散布を行う。

(4) 輪紋病・炭そ病

降雨が続くと果実への感染が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

炭そ病は前年の発生量が多く、樹上の越冬菌密度が高いと予想されるため、散布ムラが生じないようにていねいに薬剤散布を行う。また、発病果は二次伝染源となるので見つけ次第摘み取り適切に処分する。

(5) キンモンホソガ

7月29日現在の発生量はやや多く、新しい被害葉も見られている。発生のみられる園では薬剤防除の際、薬剤の選定に留意する。薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、キンモンホソガに効果の高い薬剤で防除を実施する。

2. ぶどう

(1) 灰色かび病・晩腐病

発病果房は二次伝染源となるため、見つけ次第摘み取り適切に処分する。なお、取残した房で発病すると来年の伝染源となるため、圃場に果房を残さないようにする。

(2) ベと病・褐斑病・さび病

デラウェアは収穫終了後、直ちに薬剤散布を行う。なお、ベと病は大粒種では8月以降も発生が増加する恐れがあるので、8月上旬～中旬に防除を行う。

3. もも

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) せん孔細菌病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量はやや少ない。(－)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 品種ごとの収穫開始時期を考慮し、各薬剤の総使用回数、収穫前使用日数を厳守する。

イ. 発病葉や発病果は二次伝染源になるので、見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

ウ. 例年発生が見られる園や風当たりの強い園では、防風ネットを設置する。

エ. 台風の通過等により早期に落葉すると、落葉部位からの感染が多くなるため、台風の通過や降雨前に薬剤防除を徹底する。

(2) 灰星病

7月後半の巡回調査で果実腐れの発生は確認されなかったが、早生・中生種では、8月上旬まで重要な防除時期に当たるので防除を徹底する。薬剤散布を行う場合は、収穫開始時期を考慮し農薬使用基準を遵守する。また、園内の見回りを徹底し、発病果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。

4. 西洋なし

(1) 輪紋病

今後、降雨が続くと感染が多くなるので、以下の対策を実施する。

ア. 薬剤の散布間隔があきすぎないように防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

イ. 果実への感染を防止するため、キャプタン・有機銅剤を使用する防除体系では、散布間隔を10日以上あけないようにし、本剤散布後からの積算降水量が100mmに達する前に次の薬剤散布を行う。

5. 日本なし

大雨により病害の感染・発病が多くなるため、薬剤の散布間隔があきすぎないように晴れ間を逃さず防除を行う。泥水に浸かった果実は、疫病等の果実腐敗が発生することがあるので、見つけ次第摘果し、適切に処分する。

(1) 黒星病

7月後半の巡回調査の結果、発生量は平年並である。園内の見回りを徹底し、発病果、発病葉は見つけ次第摘み取り適切に処分する。また、降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。なお、散布予定日に降雨が予想される場合には、降雨前に防除を行う。

6. おうとう

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 褐色せん孔病	多い

<7月26日付け 発生速報第4号発表>

1) 予報の根拠

ア. 7月後半の巡回調査の結果、発生量は多い。(+)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 降雨が続くと発生が多くなり、本病の葉への感染は秋季まで長期に渡る。防除に当たっては、雨の合間をみて散布間隔があきすぎないように注意する。

イ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、散布ムラが生じないようにいねいに薬剤散布を行う。なお、収穫後の薬剤散布については翌年の収穫までの総使用回数を考慮して使用する。

7. 果樹共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) 果樹カメムシ類 (カギカメシ・チャバ 初カメシ)	りんご・もも・ なし・かき	やや多い

<5月23日付け発生速報第1号発表>

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量はやや多い。(+)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 気温や湿度の高い日に果樹カメムシ類の飛来や吸汁加害が多くなりやすい傾向がある。また、今後は越冬後成虫に加えて新成虫も発生して密度が高まるため、園内を十分に見回り、樹上の寄生や被害果の発生に注意する。

イ. 園内で成幼虫の寄生や卵塊、被害果が確認される場合は、速やかに捕殺や薬剤散布を行う。

ウ. 薬剤の選定に当たっては「山形県病害虫防除基準」を参照し、果樹カメムシ類に効果の高い薬剤で防除を実施する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ナミハダニ	りんご・もも・ なし・おうとう	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

- ア. ナミハダニは高温・乾燥条件で急増する場合がありますので、園内をこまめに観察し、ハダニ類の成幼虫数が1葉当たり3頭以上見られたら薬剤を散布する。
- イ. ナミハダニの下草における増殖を抑制するため、園内の除草を励行する。なお、除草後に下草から移動したナミハダニにより樹上密度が高まることがあるので、除草後に薬剤を散布する場合は下草が枯れるまで待つて行う。
- ウ. 樹冠内部の散布ムラを生じないように不要な徒長枝はせん除し、薬液到達性を高め、十分付着するようていねいに散布する。
- エ. 気門封鎖剤の使用に当たっては、殺卵効果が期待できないため、1週間間隔で2～3回、薬液が葉に十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) ナシヒメシンクイ	りんご・もも・なし	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月後半の巡回調査の結果、発生量は平年並である。
- イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

- ア. もも、なしの果実は特に被害を受けやすいので、園内をよく見回り、心折れや被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。
- イ. 8月以降も被害が継続するため、薬剤の散布間隔があきすぎないように適切に防除を実施する。なお、被害が見られる園では、薬剤の選定に留意する。

(4) モモシンクイガ (りんご・もも・なし)

7月29日現在の発生量は平年並である。園内をよく見回り、被害果は見つけ次第摘み取り適切に処分する。なお、8月以降も被害が継続するため、薬剤の散布間隔があきすぎないように適切に防除を実施する。

(5) ウメシロカイガラムシ (もも・おうとう)

7月29日現在、第2世代幼虫の発生が確認されている。ふ化幼虫(体長0.3mm程度の橙黄色の幼虫)の防除適期は8月上旬頃になるため、樹冠上部までよく観察し、薬液が枝幹部に十分付着するように散布する。特に白い粉状の雄繭殻が多く付着している枝周辺には、薬液がしっかりとかかるようていねいに散布を行う。なお、ももの防除は収穫使用前日数を考慮し、農薬使用基準を遵守する。

8. 夏秋きゅうり

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 炭そ病・褐斑病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。

イ. 薬剤散布は、予防防除を基本とし、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

ウ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

エ. 過繁茂にならないよう適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、通風をよくする。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(2) べと病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在、発生は確認されていない（平年初確認：7月上旬）。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。

イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

ウ. 過繁茂にならないよう適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、通風をよくする。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) 斑点細菌病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく見回り早期発見に努め、発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。

イ. 降雨が続く場合には、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見て防除を行う。

(4) うどんこ病

乾燥が続いたり、草勢が低下すると発生が多くなるので、適切な肥培管理を行い草勢維持に努め、圃場をよく見回り発生初期の防除を徹底する。なお、発病葉は見つけ次第取り除き、圃場外に搬出し、適切に処分する。

9. すいか

(1) 炭そ病・つる枯病

7月29日現在、炭そ病の発生量は少なく、つる枯病の発生量はやや少ない。降雨が続くと発生が多くなるので、薬剤の散布間隔があきすぎないように雨の合間を見て防除を行う。 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元及び果実まで十分付着するようていねいに行う。

(2) 褐色腐敗病・疫病

降雨で圃場に雨水等が滞水した場合は、突発的に発生することがあるので、直ちに排水を行うとともに、防除を行う。 また、降雨が続く場合は雨の合間を見ながら薬剤散布を行う。 なお、発病果は直ちに除去し、適切に処分する。

10. 秋冬ねぎ

大雨により土壌の過湿状態が続き、軟腐病が発生しやすい状況にあることから、直ちに排水対策を行うとともに、排水が進んだところから直ちに防除を行う。

ねぎの土寄せは、軟腐病を回避するため、地温の低い早朝に行う。高温が続く場合は、無理な土寄せを行わず、涼しくなるまで作業を中止する。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(1) 葉枯病	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(＋)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 薬液が株全体に十分付着するようていねいに散布する。

イ. 降雨が続く場合は、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見ながら薬剤散布を行う。

(2) さび病

発生が見られる圃場では、降雨が続くと発生量が多くなることがあるので、薬剤の散布間隔があきすぎないよう雨の合間を見ながら薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(3) ネギアザミウマ	平年並

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 雑草での増殖及び圃場への飛来を防止するため、圃場内及び周辺の除草を徹底する。

イ. 高温・乾燥が続くと密度が急激に高まるため、圃場を観察し密度が高まる前に薬剤散布を行う。

ウ. 被害が見られる圃場では、散布間隔をあけずに薬剤散布を行い、密度の低下を図る。

エ. 薬剤散布に当たっては、薬液が株全体に十分付着するようていねいに行う。また、薬剤抵抗性出現を防止するため、同一成分の薬剤の連用を避ける。

(4) ネギハモグリバエ

7月29日現在の発生量は平年並である。今後、高温が続くと密度が高まるため、圃場をよく観察し早期発見に努め、密度が高くなる前に薬剤散布を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容
	発 生 量
(5) シロイチモジヨトウ	やや多い

1) 予報の根拠

ア. フェロモントラップでは、誘殺が断続的に確認されており、7月5半旬までの総誘殺数は、県予察圃場（寒河江市）及び地区予察圃場（酒田市）ともに多い。(+)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく見回り、早期発見に努める。

イ. 卵塊やふ化直後の幼虫の集団が見られる葉は、取り除き適切に処分する。

ウ. 幼虫の齢期が進むにつれ薬剤による防除効果が低下するため、卵塊確認時や被害発生初期（先端部が白く透けた時）に防除を行う。

エ. 台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

11. えだまめ

大雨により茎葉の損傷等が発生した場合、細菌病等の発生源になりやすいので、速やかに薬剤散布を行う。

(1) ダイズサヤタマバエ

高温が続くと発生が多くなるので、幼莢期の防除を徹底する。なお、薬剤散布の際は、薬液が莢に十分付着するようていねいに散布する。

12. きく

(1) アザミウマ類

7月29日現在の発生量は平年並である。今後、高温が続くと密度が高まるため、以下の対策を実施する。

- ア. 雑草での増殖及び圃場への飛来を防止するため、圃場内及び周辺の除草を徹底する。
- イ. 花蕾を加害されると品質低下をまねくので、薬剤散布の際は、薬液が花蕾部にも十分付着するようていねいに散布する。
- ウ. 薬剤抵抗性出現を防止するため、作用性の異なる薬剤グループを輪用散布する。
- エ. アザミウマ類はトマト黄化えそウイルス（TSWV）を媒介するため防除を徹底する。

13. 野菜・花き共通害虫

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(1) アブラムシ類	夏秋きゅうり ・すいか・きく	やや多い

1) 予報の根拠

- ア. 7月29日現在の発生量はやや多い。(+)
 - イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。

2) 防除上注意すべき事項

早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬液が茎頂部や葉裏にも十分付着するようていねいに散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(2) ハダニ類	夏秋きゅうり・すいか・ えだまめ・きく	平年並

1) 予報の根拠

- ア. 7月29日現在の発生量は平年並である。
 - イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(+)
 - ウ. 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除を徹底する。なお、薬剤散布は、薬液が葉裏まで十分付着するようていねいに行う。

2) 防除上注意すべき事項

- イ. 薬剤を散布する場合は、薬剤抵抗性出現を防止するため、同一薬剤の連用を避ける。
- ウ. 気門封鎖剤は殺卵効果がないため、1週間間隔で2～3回散布する。

病 害 虫 名	対 象 作 物 名	予 報 内 容
		発 生 量
(3) オオタバコガ	夏秋きゅうり・すいか ・秋冬ねぎ・えだまめ ・きく	多い

<5月24日付け 発生速報第3号発表>

<6月6日付け 注意報第1号発表>

<7月26日付け 発生速報第5号発表>

1) 予報の根拠

ア. 7月29日現在の発生量は多い。(+)

イ. 向こう1か月の天候は、気温が高く、降水量は平年並か多いと予報されている。(+)

2) 防除上注意すべき事項

ア. 圃場をよく見回り、早期発見に努める。特に収穫時期に近い作物は、果実、花蕾、新芽等の周辺部を含めてよく観察する。

イ. 被害を受けた果実、花蕾、新芽等は、内部に幼虫が生息している場合があるので適切に処分する。

ウ. 幼虫の寄生や被害が見られる場合は、直ちに薬剤散布を行う。なお、薬液が株全体に十分付着するようていねいに散布する。

エ. 薬剤抵抗性の出現を防止するため、作用性の異なるグループの薬剤で輪用散布を行う。

また、薬剤防除後にも被害の拡大が見られる場合には、異なるグループの薬剤を散布する。

オ. 台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、今後の発生動向に注意する。

14. 畑作物・園芸作物共通害虫

(1) ハスモンヨトウ (だいず・かき・夏秋きゅうり・秋冬ねぎ・えだまめ・きく)

フェロモントラップにおける7月5半旬までの総誘殺数は、県予察圃場(山形市)ではやや多く、地区予察圃場(鶴岡市)では平年並である。

今後、台風や低気圧の通過に伴い多飛来することがあるので、以下の対策を実施する。

ア. 本種は広食性で、だいず、果樹、野菜、花き等多くの作物を加害するので、圃場をよく見回り、早期発見に努める。

イ. 卵塊や、ふ化直後の幼虫の集団が見られる葉は、取り除き適切に処分する。

ウ. 幼虫の齢期が進むにつれ薬剤による防除効果が低下するため、卵塊確認時や被害発生初期に防除を行う。

[発生予察情報で使用される時期、量の表現の基準]

1. 時期

平 年 並	平年値（過去10か年の平均）を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
ややおそい	平年値より3～5日おそい
早 い	平年値より6日以上早い
お そ い	平年値より6日以上おそい

2. 量（発生量、発生面積及び被害量等）

過去10年間の値を、発生が多い順に下図のように並べ、本年の値との比較により求めます。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
←多い→	← やや多い →		← 平 年 並 →				← やや少ない →		←少ない→

東北地方 1か月予報 (07/27～08/26)		
2024年07月25日14時30分 仙台管区気象台 発表		
特に注意を要する事項	期間の前半は、気温がかなり高くなる可能性があります。	
向こう1か月 07/27～08/26	天候	東北日本海側では、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。東北太平洋側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。
	気温	平均気温は、東北日本海側で高い確率60%、東北太平洋側で高い確率70%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 07/27～08/02	気温	1週目は、東北日本海側で平年並の確率50%、東北太平洋側で高い確率70%です。
2週目 08/03～08/09	気温	2週目は、高い確率60%です。
3～4週目 08/10～08/23	気温	3～4週目は、高い確率60%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)					
気温	東北日本海側	向こう1か月 07/27～08/26	10	30	60
		1週目 07/27～08/02	10	50	40
		2週目 08/03～08/09	10	30	60
		3～4週目 08/10～08/23	10	30	60
	東北太平洋側	向こう1か月 07/27～08/26	10	20	70
		1週目 07/27～08/02	10	20	70
		2週目 08/03～08/09	10	30	60
		3～4週目 08/10～08/23	10	30	60
降水量	東北地方	向こう1か月 07/27～08/26	20	40	40
日照時間	東北日本海側	向こう1か月 07/27～08/26	30	40	30
	東北太平洋側	向こう1か月 07/27～08/26	30	30	40

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)